

あゆみ通信

VOL. 176

あゆみの会(真宗大谷
派大阪教区第2組同朋
の会推進員連絡協議会)
会長 細川 克彦
広報 本持 喜康

親鸞のことば

念仏を称えること、
それがすべて

しかれば本願を信ぜんには、
他の善も要にあらず 念仏に
まさるべき善なきゆえに

歎異抄

親鸞の師法然は、念仏とその他の行を比較し、念仏は行じやすく、あらゆる徳がつまっているから最も優れていると説いて「ただ念仏して阿弥陀さまに救われなさい」と念仏を広めました。親鸞もこの教えを受け継ぎました。しかし、親鸞と法然の教えに違いはありません。浄土真宗を開いたのは法然だと、親鸞は語っています。ただ、法然には他の行ではなく念仏を広めるという課題、親鸞には法然の広めた念仏を信心の側面から説くと言う課題があったと言えます。

。(名古屋別院監修「人生を照らす親鸞の言葉」より)

さあ 総会に参れ 12/17即應寺で



宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌お祝い受け奉仕団 2008年6月14日～16日 於 寶治本願(前本願寺)

をモットーに、たとえ、事情があり行事に参加出来なくても、いつどんなことが行われているのかをつなぐ「あゆみ通信」を絆に、講師先生の法話の要約や行事のあらましをお伝えして、いつも、どんな時でも「共に歩む」を目指してきました。

今回、15年の節目に当たり、あらためて初心に戻り、あゆみの会発足直後から、親身になって「あゆみの会」をお導きいただいた即應寺の藤井善隆先生(前住職)をお迎えして、下記の通り、同窓会として、思い出にふけろうと思います。

体調のゆるす方は、ぜひ、ご参加ください。

あゆみの会総会

日時 12月17日(日) 13:30

会場 即應寺(阿倍野区阪南町)

内容 議事(事業報告、会計報告、監査報告、事業計画案、予算案、役員改選、その他)

記念法話「真宗門徒の念仏生活2」(仮題)

講師 藤井善隆先生(即應寺前住職)

座談「あゆみの会15年から」
その他、当日、2024年年会費(会員2000円、家族会員3500円)を受け付けます。よろしくお願ひいたします。

第2組合同報恩講執行



2023年11月8日(水)午後5時から、阿倍野区の即應寺(藤井真隆住職)で、第2組報恩講が開催され、組内の住職や坊守、そして門徒や推進員等34名が参

15年のあゆみ

母や父の葬儀にお世話になったご住職、そして、元気なころは母親が足しげくお寺の仏事に欠かさず出かけていた、そんな即應寺の仏事に、一段落したところに、最初は義理と厄介のつもりで出かけたのがきっかけ。

一方では、友人と「自分探し」を兼ねて、四国88か所巡拝を2年かけて、回っていた。そして、あらためて浄土真宗と言う宗教に関心を持った。時は宗祖750回御遠忌法要を迎えるべくお待ち受けで、第2組では10年ぶりに第2期推進員養成講座が開催されることになり、住職に背中を押されて、ご門徒さんたちと参加することに。前期5回、後期(本山研修)を経て修了。その頃には、お寺の垣根を超えて、共に学ぶもの同士のつながりが出来た。そして、第2組に無かった組推協「あゆみの会」が、第1期の先輩たちとで誕生した。そして、今、お内仏の前で勤めている。仏法不思議。(本)

早いものですね。2008年12月にこの即應寺で産声を上げたあゆみの会が、第2組の皆さん挙げて力を注いでくださった、第3期、第4期の皆さんを加えて、今年で15年を向かえました。60代で参加したお仲間ももう80代になってきました。

この間、本山での宗祖の750回御遠忌法要、そして今年、宗祖生誕850年・立教開宗800年慶讃法要を勤めてきました。

ここまで来られたのも、本山の御影堂で、宗祖親鸞聖人の前で、仏弟子としての誓約を仲間と共にし、自坊に戻って、毎年お寺の仏事に参加し、第2組の同朋大会や聞法会、そして合同報恩講に、また、大阪教区の仏事に参加してきました。

あゆみの会は「共に歩む」



加しました。

開会后、正信偈(真四句目下)、念仏讃(洵三)、和讃「弥陀大悲の誓願を〜次第6首)、回向「願依此功德」を組内の住職による法中13名と共に全員で勤めました。

続いて、戸次公正師(第22組南冥寺住職)より講題「『報恩』とは?一恩に報(むく)いる・恩を報(しら)せる」として、ご法話をいただきました。

先生は冒頭、「恩に報(むく)いる」とは、出遇ったことが縁で、いのちの恩を教えられた。そのことに応えたい。「恩を報せる」とは、思いがけず賜った、いのちの恩に驚いたから、誰かに伝えたいと、話されました。そして、親鸞聖人から伝えられた大事な教えとして、「教行信証」から、①「聞思して遅慮することなかれ」、②「慶ばしいかな、心を弘誓の佛地に樹て、念を難思の滂海に流す」、③「前を訪え」について、「教行信証」の言葉を紹介されながら話されました。

また、金子大榮師が紹介された、親鸞聖人の教えである「お念仏は讃嘆であり、懺悔である」について、作家井上ひさし氏の作品「ふふふ」の中の「万引き」と言う短編を紹介されながら、「お念仏は懺悔」について話されました。休憩後は、コロナで途絶えていた、お斎をいた



だきながらの歓談。そして墨林組長の進行で、同朋総会が行われました。事前のアンケートから、概要が紹介され、数人のご住職から寺院の抱える実情や課題について、また門徒からはこれからの第2組興隆について問題について意見が出され、今後、共に協議していくことが確認され、恩徳讃を斉唱し、閉会となりました。

戸次先生の法話聞書 細川克彦(佛足寺)

先生は「『報恩』とは?一恩に報いる・恩を報せる」という講題で、はじめに「『報恩』と言うことが分かっているだろうか、『報恩』の生活が出来ているだろうか」と問題提起され、配られたレジメの冒頭の戸次先生の詩を読み上げられました。

「報恩」
恩に報いる
出遇ったことが縁で
いのちの恩を教えられた
そのことに応えたい…
恩を報せる
思いがけず賜った
いのちの恩に驚いたから
誰かにつたえたい

親鸞ブームが起こったのは、大正期から昭和期にかけてで、『歎異抄』が広く世に知られるようになったのは、清澤満之師が「余が三部経」として取り上げられたり、倉田百三が戯曲「出家とその弟子」を書いたからである。そして、吉川英治や丹羽文雄が「親鸞」という題名で小説を書いて広く読まれたと。

先生は親鸞聖人が執筆された「教行信証」からいくつもの感動された言葉を紹介されました。

はじめに、「化身土巻」の文より「慶ばしいかな、心を弘誓の佛地に樹て、念を難思の法海に流す」(聖典400P)を引かれ、先生の意識として「私は心を本願の大地に樹てました。私の心の底には海があり、激しい苦しみや深い悲しみをそっと受け入れてくれます。だからどんな状態になっても、

お悔やみ申し上げます

第2組専行寺(武石由美住職)の前住職武石博様(長く第2組組長を歴任)が、去る10月22日にご逝去されました。

喪主は武石昭氏(故人の次男で由美住職の夫)で、通夜が10月26日午後6時から。そして葬儀は10月27日午前10時30分から専行寺で厳粛に行われ、第2組からご住職や坊主さん、並びに寺族など、また、あゆみの会から細川克彦会長が弔問されました。ここに謹んでお悔やみ申し上げます。



恐れず、疲れず、ゆうゆうと迷っていけます」と。

また「安樂集」より引用され「前に生まれん者は後を導き、後に生まれん者は、前を訪え」(聖典401P)を、「現在を生きる私たちは、過去の死者たちの記憶に向きあい、想像力を働かせ、その願いを問い訪ねていくのだ」と訳されました。

また、「聞思して遅慮することなかれ」(聖典150P)を、「本当のことを聞いてしまったら、もう、じっとしておれない。さあ、立ち上がろう」と。

つづいて「広大会」(聖典480P)を、「私たちはずっと昔、阿弥陀さまの法会に共に座っていたことを思い出そう」と、ロシアがウクライナに攻め入った時に詩を作ったと。

また、金子大榮師の言葉「お念仏は讃嘆であり、懺悔である」(聖典520P)から、井上やすしエッセイ集「ふふふ」から「万引き」と言う小編がとても心に残っていたが、懺悔と言う言葉であらためて思い出されたと。

報恩と言うことで、先生が親鸞聖人の著述から感動されたお言葉を、いくつか熱く語って下さいました。